のスタッフも今までは研究に馴染みが薄かったようである。十万町歩の地区内に設けた試験地の測定はかんがい排水局最前線のスタッフ水門管理人あるいはさらにその代理に頼っているがなかなか信頼するデータを得るのに困難がある。彼等は農民に比較すれば intelligent だといわれるが習熟するまでにはかなりの時間が必要であろう。かたや第1等級技官「engineer」といわれる人達の水準は日本に比較しても遜色はなく，乏しい筆者の経験からの感想ではあるが現在のように情報の発達した社会では大学出の技官であれば国のいかんを問わず水準に大差はないのではなかろうか。ただこの国の engineer 達は純土木の出身である点がひとつの問題であるが，それは実社会にでてからの経験である程度カバーできないことではないであろう。圃場内水路の整備についても必ずしも日本的芸の細かさは必要でなく，その国の歴史的社会的条件に応じた方式が採り入れられてしかるべきである。そういう意味で私が着任してから一年数ケ月の間あるべき姿を求めて未だに着工できないでいる現地スタッフの慎重さと辛抱強さにはただただ敬服するばかりである。

おわりに

昨年5月，当時の副首相（現首相）のお声がかりで

二期作化計画表

年　月	かんがい保証面積（エーカー）	年　月	かんがい保証面積（エーカー）
1970年2月	80,000～100,000	1973年2月	210,000～230,000
1971年2月	100,000～130,000	1973年2月	240,000～250,000
1972年2月	160,000～180,000		

「ムダ農業開発庁」が発足し強力にその施策を押し進めていくことになった。年度別二期作計画は表のとおりで1973年の完全実施を目指して精一杯の努力が続けられている。事業完成の暁には米の自給達成と地域農民の生活向上という輝かしい金字塔をうちたてることであろう。この意欲的なムダ河かんがい計画とまだ呱々の産声をあげたばたりの在外研究員（農業土木）に対する暖いご理解とご支援をお願いして本稿の筆をおきたい。（八郎潟新農村建設事業団）

（前熱帯農業研究センター在外研究員）

サンパウロの近郊農業と流通市場

神戸賀壽朗

昨年，はからずも伯国サンパウロ市の近郊農村を三度び訪れて，約2カ月近くを過す機会をもったので，貴重な経験の一部を報告させていただくことにする。

ブラジルの実質的な経済の主都サンパウロ市（650万人）は，南米大陸の 800 m の大高原に幾何学的なシルエットを青空に描いて展開する南米屈指の近代的都市である。この大都市は，その巨大さのゆえに，多くの都市問題をかかえている。たとえば，郵便配達区域はビジネス・エーリアに限られ，電話もまた市のわずかな地点をおおうに過ぎない。多くの発展途上国と同じように低所得人口が都市に急速に集中しているという意味で，後進性と先進性とをあわせもった魅力のある大都市である。日本の国土の70%にあたるサンパウロ州に約1,800万人が住み，そのうちサンパウロ市に同州の1/3以上の人口が集中しているわけである。その他のおもな都市はサンパウロ市の北 100 km にあるカンピーナスと，南70 km のサントスの港街にそれぞれ50万人，あとは10万人以上の都市が数市あるに過ぎない。

サンパウロ市から東約500 km に450万人の観光都市リオデジャネイロがあるが，やはりブラジル第一の都市はサンパウロである。リオデジャネイロには，北伯の流民が南流してコルドバの丘の斜面に定着しているので，ホテル・サービス業などの観光資本関連の産業所得者との階層の分化が激しいことをモジダスクルーゼスの野菜農家の聴取りで知ることができた。古い邦人の植民地モジは，わが国でいえば，東京と大阪の中間に住置する中京の立地に当たり，この地の邦人は野菜の種類や品質，規格によって，東西に自由に出荷することができる恵まれた立地である。リオに比較するとサンパウロ市ははるかに中流階層の多い都市だという印象であった。かっての首都リオデジャネイロの人口を抜いて，南米第一の大都市に発展したのは，肥沃なテイラロッシャの土壌におけるコーヒー，棉花，砂糖，フェジョン（豆），米などの集散地であったからである。また，近年にブラジル工業の実に60%が集中したためで，サンパウロ州は連邦税収の65%を

フェジョン（豆）でゲームする伯人労働者

負担しており「他の22州の牽引車」[1]となっている。

青果物の卸売流通（SEAZA）

サンパウロ市には，50 ha 余もあるといわれる世界で最も大規模で，最も大衆的な卸売市場が数年前に市の南西の郊外に生まれている。8年振りに訪れた市の中心部にあるカンタレーラ卸売市場は，もはやパーキングの場所も狭く，その機能は市営中央公設小売市場となっている。このかっての市の中心部プラサ・ド・セから歩いて10数分の卸売市場は，市場周辺部に，わずかな問屋街をもつだけになり，次第にビジネス・センターにかわっている。

新しいセアザでの取引方法で，もっとも興味をひくのは，対面取引が主であって，セリが行なわれていないことである。わが国では，セリ取引が最も需給を反映する公正な価格形成の方法だとされているが，それが擬制された，必ずしも需給を公正に反映した価格でないことは周知のことである。限られた価格情報とカンに頼って，天気，買気，思惑に支配された“セリの公正”を求めることが無理な注文なのである。この近代的な市場は古い取引の伝統に従って，有識者によって構成される建値委員会の決定にしたがって，品目別基準価格を設定して，対面取引価格の指導性を確立していることは興味深い。多くの批判があるにしても，この方式は，セリに偏ったわが国の流通制度の再編制にとって他山の石となる。

シラスコというバーベキュー
食肉の小売価格は日本の 1/10
―― 末端流通は kg 単位での取引だ ――

東京都の築地，神田，淀橋などの全中央卸売市場の面積をあわせたほどのセアザには，いわゆる買参人だけでなく，マイカーの最終消費者が，午後10時頃より真夜中まで続々と集って，生産者から直接相対買いをしている光景は壮観であった。

自由小売市場（FEIRA LIVRE）

サンパウロ市の配分流通過程において，次に注目すべきことは，これらの買参人の多くがフェーラ・リーブレ（自由小売市）において最終消費者に販売していることである。スーパー・マーケットを除いて，ほとんど青果物商を見かけないのは，このフェイラ・リーブレが，サンパウロ市中心部に一週間のうち，実に延べ374回も定日定所に開市されているためである（1表）。

豊富・低廉な野菜直売
フェーラ・リーブレの賑い

フェーラ・リーブレでの小売人フェイランテ（FEIRANTE）は，市当局の監督下にあって，登録によって，店舗を開くことができる。その小売形態は，天幕を張った小屋掛けで，売る商品によって，売場の間口は 8 m～1 m，奥行は 1 m～3 m ほどとまちまちである。場代は8 m× 1 m の小間で，売場当たり半日

第1表　自由小売市場の地区別分布
(1970 サンパウロ資料)

地区別＼曜日	火	水	木	金	土	日	延計
A　セ(中心部)	4	4	3	5	4	2	22
B　イピランガ	8	10	10	7	6	7	48
C　マリアナ	8	2	5	5	3	6	29
D　ピネイロス	5	7	7	6	10	1	36
E　モ　カ	10	9	11	6	—	10	46
F　ペンニヤ	11	14	9	10	11	11	66
G　サンタナ	4	10	9	9	11	9	52
H　フリゲシヤ	7	8	6	8	6	9	44
I　ラ　パ	6	5	4	4	5	7	31
開市数1日当	63	69	64	60	56	62	374

(注)　コチア産組井上忠治技師から送付された資料をもとに作成

(8時から正午まで) 約3cr$ (1cr$ 邦価80円) ほどで3カ月分をまとめて市当局に納付し，販売権を入手することになっている。フェイランテのなかには連日，セアザや卸問屋から仕入れて販売している者もあり，日系人が少なくとも1/3以上を占めていて，地球の裏側にいるという感慨も起らない。このフェーラ・リーブレは月曜日を除いて，サンパウロ市の中心部の定った60～70カ所の道路や広場で，交通が止められて市がたち，大変な雑踏である。消費者は週間に必要な鮮度商品を，この市場でまとめ買いする習慣になっている。

第2表　サンパウロにおける開市数 (1962)

月	火	水	木	金	土	日	計
32	59	53	55	56	61	59	375

1962年の資料によると(第2表)，当時は休市の曜日はなく，市内の各地で開市されていたが，今回，入手した前掲の資料とくらべると延開市数ではほぼ同じであることがわかる。このことは市民にとって，欠くことのできない末端流通チャンネルとして定着していることをうかがわせるのである。

フェイランテの販売商品は，野菜，果実，卵，肉，鮮魚をはじめ，穀物，香辛料，加工食品 (塩干，砂糖加工品等) や日用雑貨品から盆栽など，日常生活に必要なものは何でも調達できる。手押車で家族揃っての買物風景もみられ，異人種混交のコミュニケーションの広場が，生活必需品の調達をめぐって繰り広げられている。かって，市当局が交通，衛生，美観のためにフェイラの開設を禁止し，政治問題化したことがあると聞いたが，大衆の生活に根付いたこの豊富，かつ低廉な配分体制は容易に変革されないであろう。

試みに小売店によって多少の価格差はあったが，若干の青果物の価格は (第3表) のように，きわめて低廉であった。

第3表　表示価格 (1970年6月)

トマト	80～110円	1kg
キャベツ	大80円　小40円	1個
ダイコン	中25～30円	1本
サトイモ	64円	1kg
トロロイモ	64円	1kg
サツマイモ	40円	1kg
サヤインゲン	96円	1kg
ブドウ	240円 (マスカット)	1kg
スイカ	32円	1kg
パパイア	大160円　小40円	1個
アバカテ	40円	1個

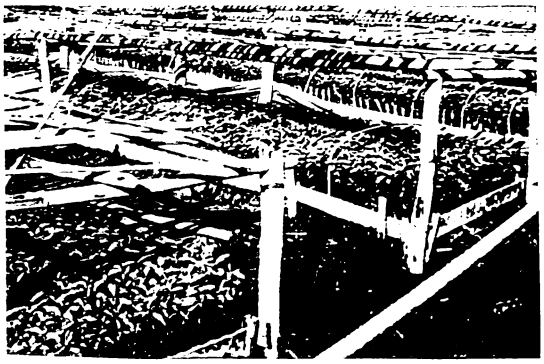
近郊の投機的移動農業

先に触れたセアザの消費者への対面取引や，このフェイラでの取引で近郊生活者が直接持ち込むものは，圧倒的に軟弱野菜である。市の東部近郊の葉菜専作地

幾丘を越えて続くバタタ (ポテト) 畑
―― 投機的農業の代表作の一つだ ――

域においての見聞では，レタスなどの1作作付規模が1アルケール (2.4 ha) に達し，年間数作のズラン播きで，レタスの連作を行なっているモノカルチャーの日系農場もあった。また，資本の乏しい日系農家は水利のよい丘陵の低地部を借地して，多品目の葉菜を連作し，生育に障碍が起るようになると，他に移動するということであった。

サンパウロ州における農業は，歴史的にはコーヒー，



ビニール鉢でのコーヒー苗の育成

棉作などの立地移動—外延地域への掠奪的移動を特徴とした。安い林地を取得し，焼畑開園によって，現地の低賃金労働者（カマラーダ）を利用する移動農業である。今日でも，農機具等の労働手段のみを所有して，一獲千金をねらう馬鈴薯の生産農民(パタティロ)は，かってのコーヒー，棉作や牧草栽培のあと地で，

インゲン畑のカマラーダ達
—— 低労賃・低地価・高資材が
伯国農業の特徴だ ——

休閑ないし放置された土地を借地して，数年に一度でも当れば引き合うというカケを続けている。

安定した営農を確立している西部近郊の野菜地帯でのパタティロは，土地利用の制約から，農場以外に，馬鈴薯作のための1作限りの借地をしている例もあった。

このような農業の移動性は，相対的に土地資源と労働力資源に恵まれ，かつ農産物供給力の弾力性の高い新開地農業にみられる特質だといえよう。また，この非定着性を助長している他の原因の一つは，外貨不足，インフレーション等の経済環境のもとで，割高な農業用資材や労働手段の調達が困難なために，集約化が阻まれているからである。さらに農業生産の刺激策として，ブラジル政府が採用した収穫期返済の特別融資制度が，大いに活用されていることにもよる。

農産物価格変動の激化は，ますます移動的投機農業を助長し，加えて大陸性の局地的な気象条件の熾烈さは，資本装備の乏しい農場の基盤をゆさぶっている。

開拓前線を含む奥地からの遠郊農業の農産物供給の不安定さは，たえず近郊農業の収益を不安定なものへと追い込んでいる。加えて，遠郊地へ向った地力収奪的な外延移動農業者が，サンパウロ市近郊へと再流入し，近郊農業の適作物である野菜や花作を選好するので，供給はたえず不安定な状態におかれている。このようなサンパウロ市の近郊農業の流動性と配分流通の末端の姿は，わが国の今後の近郊農業を考える上で，興味深いものであった。

（神奈川県農政部総括主幹）

注）1. ブラジル経済事典（伯国商工会議所刊28頁）
2. ブラジル国における農産物の改善に関する技術協力報告書（縫　直己　1964）

南ヴィエトナム・ヴィエトナム人

馬　場　嘉　光

世界の分裂国家のうち，三つまでもがアジアにあることは，アジア人にとって最大の不幸である。ヴィエトナムもその一つ。ヴィエトナム人にとってさらに不幸なことは，第二次大戦が終結し，フランスとの抗争を経て漸く独立を取り戻したのもつかの間で，南北に分れた同民族が今に至るまで血を流して戦っていることであろう。南ヴィエトナムを訪れる度に，何時も彼等の民族的な悲劇に同情の念を禁じ得ない。しかし，われわれが同情を寄せる割には，ヴィエトナム人は苦悩を顔に出さない。驚くほど我慢強いというのか，闘争的でねばり強いように見受ける。十年におよぶヴィエトコン・ゲリラとの戦いをみると，双方ともにヴィエトナム人の特質が出ているような気がする。千年を越える中国の支配を受けた歴史や80年におよぶフランスの植民地としての体験が，かくも強靱な国民性を形成したのであろう。しかし，そのヴィエトナム人も